
K 体
 V K -線形空間
 $f: V \rightarrow V$ K -線形写像

$f \circ f = f$ ならば、 $V = \text{Ker } f \oplus \text{Im } f$ となることを示せ。

.....
 準同型定理より

$$V / \text{Ker } f \cong \text{Im } f \tag{1}$$

これより $\dim_K V = \dim_K \text{Ker } f + \dim_K \text{Im } f$

$f \circ f = f$ より $f(f(v)) = f(v)$ である。この為、写像 f を $\text{Im } f$ に制限した写像は恒等写像である。

$$f|_{\text{Im } f}: \text{Im } f \rightarrow \text{Im } f, \quad f(v) \mapsto f(v) \tag{2}$$

この為、 $\text{Ker } f \cap \text{Im } f = \{0\}$ であることが分かる。

つまり、 $V = \text{Ker } f \oplus \text{Im } f$ である。

任意の集合 I に対し、

$$\prod_{i \in I} K \cong \text{Hom}_K(\bigoplus_{i \in I} K, K) \tag{3}$$

を示せ。

.....
 $\prod_{i \in I} K$ と $\text{Hom}_K(\bigoplus_{i \in I} K, K)$ は線形空間である。

$h \in \text{Hom}_K(\bigoplus_{i \in I} K, K)$ は線形写像であり、 $\bigoplus_{i \in I} K$ の元との内積を取る $\prod_{i \in I} K$ の元に対応する。 $\bigoplus_{i \in I} K$ の成分は有限個を除いて全て 0 であるので、 $\prod_{i \in I} K$ の元との内積は有限和となり、 K の元となる。

この為、次の線形写像 f は全射となる。

$$f: \prod_{i \in I} K \rightarrow \text{Hom}_K(\bigoplus_{i \in I} K, K) \tag{4}$$

$\text{Hom}_K(\bigoplus_{i \in I} K, K)$ の零元は $\bigoplus_{i \in I} K$ 上の零写像であるので、 $\text{Ker } f$ は $\prod_{i \in I} K$ の零元のみとなる。この為、 f は単射でもある。

よって、

$$\prod_{i \in I} K \cong \text{Hom}_K\left(\bigoplus_{i \in I} K, K\right) \quad (5)$$

である。

整数 m を $m \geq 0$ とする。

1. $\text{Ker } f^m \subset \text{Ker } f^{m+1}$ (ただし、 f^0 は恒等写像)
2. $\text{Ker } f^m = \text{Ker } f^{m+1}$ ならば、 $\forall p \geq 0$ に対して $\text{Ker } f^m = \text{Ker } f^{m+p}$
3. $n = \dim_K V$ のとき、 $\text{Ker } f^n = \text{Ker } f^{n+1}$

.....

1. $\text{Ker } f^0 = \{0\}$ であるので、 $\text{Ker } f^0 \subset \text{Ker } f^1$ である。
 $\forall x \in \text{Ker } f^m$ の時、 $f^m(x) = 0$ である。 $f^{m+1}(x) = f(f^m(x)) = f(0) = 0$ となるので、 $x \in \text{Ker } f^{m+1}$ 。
よって、 $\text{Ker } f^m \subset \text{Ker } f^{m+1}$ である。
2. $\text{Ker } f^m = \text{Ker } f^{m+1}$ であるので、準同型定理より

$$\text{Im } f^m \cong V / \text{Ker } f^m = V / \text{Ker } f^{m+1} \cong \text{Im } f^{m+1} \quad (6)$$

となる。

線形写像 $f : V \rightarrow V$ を $\text{Im } f^m$ に制限すると

$$f|_{\text{Im } f^m} : \text{Im } f^m \rightarrow \text{Im } f^{m+1} \quad (7)$$

は同型写像である。同様に f を $\text{Im } f^{m+1}$ に制限すると

$$\text{Im } f^{m+1} \cong f(\text{Im } f^{m+1}) = \text{Im } f^{m+2} \quad (8)$$

となり、

$$V / \text{Ker } f^{m+1} \cong \text{Im } f^{m+1} \cong \text{Im } f^{m+2} \cong V / \text{Ker } f^{m+2} \quad (9)$$

となる。

$\text{Ker } f^{m+1} \subset \text{Ker } f^{m+2}$ であるので、 $\text{Ker } f^{m+1} = \text{Ker } f^{m+2}$ である。

同様の議論を繰り返すことにより

$$\text{Ker } f^m = \text{Ker } f^{m+p} \quad (10)$$

が得られる。

3. Ker の列

$$\text{Ker } f^0 \subset \cdots \subset \text{Ker } f^m \subset \text{Ker } f^{m+1} \subset \cdots \quad (11)$$

は $\text{Ker } f^n = \text{Ker } f^{n+1}$ となる n があれば、それ以降全て等しくなる。

$$\text{Ker } f^0 \subset \cdots \subset \text{Ker } f^n = \text{Ker } f^{m+1} = \cdots \quad (12)$$

$\text{Ker } f^m$ は V の部分空間であるので $\dim_K \text{Ker } f^m \leq \dim_K V$ である。

$\text{Ker } f^m \neq \text{Ker } f^{m+1}$ であれば $\dim_K \text{Ker } f^m < \dim_K \text{Ker } f^{m+1}$ である。

これにより $n = \dim_K V$ 以降は全て等しくなる。

$$\text{Ker } f^n = \text{Ker } f^{n+1} = \text{Ker } f^{n+2} = \cdots \quad (13)$$

1. 複素 2 次正方行列 A について、 $A \neq 0$ かつ $A^2 = 0$ をみたすものは $\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ と相似であることを示せ。

2. 複素 3 次正方行列 A について、 $A^2 \neq 0$ かつ $A^3 = 0$ をみたすものは $\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ と相似であることを示せ。

1. あるベクトル $\mathbf{p} \in \mathbb{C}^2$ が存在し $A\mathbf{p} \neq \mathbf{0}$ とする。

2 つのベクトル $\mathbf{p}, A\mathbf{p}$ は次のようにして一次独立である事がわかる。

次の式に A をかける。

$$a_0\mathbf{p} + a_1A\mathbf{p} = \mathbf{0} \quad (a_0, a_1 \in \mathbb{C}) \quad (14)$$

これにより $a_0A\mathbf{p} = \mathbf{0}$ となり、 $a_0 = 0$ が分かる。これにより $a_1 = 0$ となるので、 $\mathbf{p}, A\mathbf{p}$ は一次独立である。

そこでこのベクトルを並べて行列 P を作る。

$$P = (A\mathbf{p} \quad \mathbf{p}) \quad (15)$$

列ベクトルが独立なので P は正則行列である。

$$AP = A(A\mathbf{p} \quad \mathbf{p}) = (\mathbf{0} \quad A\mathbf{p}) \quad (16)$$

$$= (A\mathbf{p} \quad \mathbf{p}) \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (17)$$

P^{-1} をかけることにより $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ となる。

これにより A は $\begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ と相似である。

2. $A^2\mathbf{p} \neq 0$ となるベクトル $\mathbf{p} \in \mathbb{C}^3$ を取ってくる。

3 つのベクトル $\mathbf{p}, A\mathbf{p}, A^2\mathbf{p}$ について

$$a_0\mathbf{p} + a_1A\mathbf{p} + a_2A^2\mathbf{p} = \mathbf{0} \quad (18)$$

を考える。 A^2 をかけると $a_0A^2\mathbf{p} = \mathbf{0}$ となり $a_0 = 0$ が得られる。 A をかけて $a_0 = 0$ を当てはめると $a_1A^2\mathbf{p} = \mathbf{0}$ となり $a_1 = 0$ が得られる。 $a_0 = a_1 = 0$ より $a_2 = 0$ となり、ベクトル $\mathbf{p}, A\mathbf{p}, A^2\mathbf{p}$ は一次独立であることが分かる。このベクトルを用いて正則行列 P を次のように定める。

$$P = (A^2\mathbf{p} \quad A\mathbf{p} \quad \mathbf{p}) \quad (19)$$

$$AP = A(A^2\mathbf{p} \quad A\mathbf{p} \quad \mathbf{p}) = (\mathbf{0} \quad A^2\mathbf{p} \quad A\mathbf{p}) \quad (20)$$

$$= (A^2\mathbf{p} \quad A\mathbf{p} \quad \mathbf{p}) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (21)$$

これにより $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ であるので A は $\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ に相似である。
